

テラコッタ彫刻の鑑賞と学生の造形に対する意識の変化

大塚 習平^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

保育学科学生に課している粘土制作において「焼きものといえばテーブルウェア」という学生の概念を崩す目的で、筆者が制作した等身大のテラコッタ彫刻を、学内に一定期間設置した。そして授業の中で鑑賞し、アンケート調査を行ってみた。その結果、焼きものに対する視野が広がり、制作に対する意識に変化が見られた。自作作品の鑑賞による教育効果についての考察を加えた。

【キーワード】

造形教育 彫刻 テラコッタ 鑑賞

1. はじめに

幼児にとって粘土に触れる体験は、周知の通り様々な点で有益な教育効果を生む^(註1)といわれている。本学では将来、幼稚園教諭及び保育士となる学生に対し、2年間のカリキュラムの中、「造形」科目において、焼き物（テラコッタ粘土）制作を課している。テラコッタ粘土を用いた主な理由は、入手しやすい事、扱いやすい事、変形や割れが入りにくい事、質の変化による驚きが体験できる事、作品として残す事が出来る事、達成感や満足度が高い事などによる。学生には、粘土という素材体験および技法習得を目的とし、主にテーブルウェア作品やオブジェを紹介し、取り組んできた。これまでの傾向として、ほとんどの学生がテーブルウェアを選択し、制作してきている。これに比べ、自由度の高いオブジェを制作した学生は、ごく少

数（約5%）という結果となった。

テーブルウェアの具体的なものとしては、マグカップ（図1）、小物入れ（図2）、お皿（図3）、お椀（図4）、小鉢（図5）、蓋物（図6）等が多く見られた。他に花瓶（図7）、香炉（図8）、フォトフレーム（図9）等も数点制作された。そして、数少ないオブジェの具体的なものとしては、チェス板（図10）シーサー（図11）、手（図12）が見られた。これらのオブジェも、どこかパターンに則ったような形である印象を受けた。

筆者はこうした焼きもの制作に関する、半ば固定化されてしまった概念を崩す目的で、自作のテラコッタ彫刻3体^(註2)を、それぞれ一定期間、学内展示（図13、14、15）してみた。そして、彫刻作品（図15）について、本学学生約200名を対象に、授業内で鑑賞の時間を設け感想を求めた。その結果、学生の焼きもの制作に対する意識の予想以上の変化が見られた。この事は、ひいては指導者としての意識の変化にも繋がっていると考えられる。

<連絡先>

大塚 習平 otsuka@shohoku.ac.jp

2. 展示作品について

作品タイトル「雲の記憶」(図15)、材質はテラコッタ・朴木・石膏、台座を含む高さ180cm、幅60cm、奥行き50cm、総重量約70kgの人体像である。本体は彫塑用粘土で原型を成形。石膏キャストを行い、テラコッタ粘土に材質を置き換えた。像本体の高さは約160cmであるが、窯の大きさの関係により、生乾きの状態で4つのパーツに分割し、焼成した。焼成温度は約800度。焼成後、4つに分けたパーツを石膏で繋げ、再び一体にまとめ、更に内部を木材で補強した。この時、焼成により歪んでしまった部分をヤスリで削って修正しておく。そして作品表面に胡粉と日本画の顔料と木工用ボンドを混ぜ合わせ、水で溶き、像全体に塗り込んで、風合いを整えるようにした。台座は、きめ細かく歪みの少ないホオノキを用いた。そして台座上面中央には心棒を立て、作品の転倒を防止するとともに、作品の位置がずれないようにした。台座表面は蚤で削りオイルステインを塗った上から、石膏や粘土を擦り付けて、台座と作品との質感を整えた。

3. 展示場所について

本学1号館1階階段踊場(図16)に設置した。ここでは、以下のような視覚効果が見られた。鑑賞者は最初、作品に対し見上げるようにして近づいていき、階段を6段上がると自分の目線で作品と向き合う位置に立つ事となる(図17)。仕切り等は設けていない為、誰でも自由に作品に触る事ができる(図18)。鑑賞者は階段を上がりながら、好きな高さや角度から作品を見る事ができる(図19)。また、2階吹き抜けから作品全体を見下ろす事もできる(図20)。作品の背後は一面ガラス張り緑豊かな野外が見える為、テラコッタ作品が

緑の中に、際立って見える(図15)。人体像は斜め上を向いたポーズで直立している為、正面から顔の表情の全てを見る事はできない。それは作者が見る者の視線が像全体を捉えるよう、表情が見えないポーズにしている為である。しかし、鑑賞者が立像の表情を見たい場合は、階段を登る途中、もしくは登った後に、像を俯瞰しながらじっくり鑑賞する事もできる(図21)。

4. 学生の反応 場所について

学内に作品を設置し、授業で学生約200名と鑑賞し、アンケート調査を実施した所、「たくさんの人が通る場所で良かった」「学生や先生方、来客の方も気軽に観る事ができると思う」「美術館で観るよりも面白かった」などの感想が見られた。何故「面白かった」のかというと、作品設置場所が階段の踊場だった事によると考えられる。それは「階段を登りながら、色々な高さや角度から見る事ができて面白かった」「観る角度により作品の表情や形、色、雰囲気は刻々と変わった」という感想が多かった事からもわかる。

作品の表情について「下から見ると幸せそう、上から見下ろすと悲しそうな顔に見えた」それとは逆に「下から見ると切なげな表情でしたが、上から見た時は笑顔のように見えました」という相反する感想が見られた。ユニークな感想として「下から見るとお姉さんに見えて、上から見るとおばさんに見えた」「見る位置によって大人に見えたり、子どもに見えたり、神様に見えたりした」という、個人の持つイメージが作品に反映された内容も見られた。

また、「平らな場所にあると見えない部分が、たくさんある事がわかった」という発見や、「下から見上げた時は顔の表情が見えなかった為、体全体の印象が強く残った」という、作者のねらいを

読み取ったような感想も見ることができた。以上の感想から、作品鑑賞を通して、観る角度によって様々な表情を見せる、彫刻という3次元表現ならではの面白さ^(註3)に気付くことができた学生が、多く見られた。

さらに、設置場所について「日差しが当たる場所で良かった」「後ろから光が当たるとすごい綺麗な女性に見えた」「光が当たっている時と当たっていない時を見比べてみたい」と、彫刻の本質である光と影について気付く学生も見られた。そして「野外に置いて良かったのでは」と彫刻作品ならではの魅力や可能性^(註4)について触れる感想も見られた。

また、設置場所についての批判的な意見としては「素通りしてしまう人も多そう」「何らかの事故で壊れてしまう危険性がある」というものも見られた。今後の課題として取り組んでいきたい。

5. 学生の反応 材質について

テラコッタ粘土という材質については「授業で扱ったのと同じ材質なので親しみを感じた」逆に「同じ材質とは思えなかった」という相反する感想が見られた。またテクスチュアについて「滑らかだと思って触ったら石のようにザラザラで驚いた」と、触覚による発見も多く見られた。さらに「もっと色々な立体作品を見たい」と関心を持つ学生も見られた。また、作品タイトルと作品の関係を結び付ける事により「もっと自分の想いを自由に表現しても良い事を学んだ」「作品を見る事で作者がどんな考えを持っているか分かった」「イメージできるって楽しい」「もう一度テラコッタ粘土で作りたい」「今度作る時は自然を題材にしたい」等イメージを具現化する表現活動に対する意欲の高まりが感じられた。

6. おわりに

保育現場での指導者育成の為、これまで粘土制作において、素材体験と技法を身につける事に重点を置いてきた。今回、自ら制作した作品を学生と鑑賞する試みを通して、立体作品の3次元性の面白さについて気付いてもらえたり、ザラザラした触感の素材について意識できたり、制作におけるイメージの幅を広げたりするきっかけとなった。私は学生に、焼きものの粘土といえは「用途のあるものを作るための材料」と捉えてしまうだけではなく、「自由な発想を具現化する為の材料」としても捉えてもらいたいと考えてきた。柔軟な発想ができる作り手であると同時に、導き手でもある人材育成の為、今後も様々なアプローチを続けていきたい。

謝辞

作品「残されたかたち」(図13)は、平成21年度湘北短期大学助成金を得て、フィレンツェで制作した研究結果です。また、作品設置に際しまして、リスクを承知でご快諾下さった大学関係各位に謝意を表します。

註

- (1) 粘土の有益性には諸説あるが、花篤實と岡田愨吾編著による「造形表現 理論・実践編」(三晃書房 pp.123-124)では「粘土には手や指を道具として使うことで、いろいろな形やものをつくることのできる豊かな可塑性がある。道具類を自由に使いこなせない幼児にとって最も適した造形素材といえる。(中略)ねんどを使った造形活動では、日ごろと違う子どもの姿(集中力・持続性・つぶやき・意欲など)が発見できる。(中略)ねんどを使った造形活動では、つぶしたり、へこましたりして形が変わっていく変形の造形活動や逆にちぎったり削ったりするマイナスの造

形活動が盛んに行われる。また、壊すという他の活動では見られない活動が行われる」と、まとめられており、幼児期に体験させておきたい活動内容について述べている。さらに粘土を用いた活動について「全身で『汚れることの気持ちよさ＝きれいにすることの気持ちよさ』を味わうことができる」という点にも触れている。

また、子どもの造形表現研究会編著「楽しい造形表現」(圭文社 pp.122)では「特に年少の子どもにとって、“泥んこ遊び”は、創造の原点と言えます。砂も含め、可塑性の強い粘土素材は、想像力を満足させ、飽きさせない魅力があります。」として、粘土が幼児や人間の持つ表現の欲求を満たすのに大変適した素材であると述べている。

さらに V ローウェンフェルドは「芸術による人間形成」において「粘土の実際の性質は、その可塑性にある。(中略)それは粘土の可塑性を通して、子どもが他のどんな媒介物よりもいっそう容易に、概念からの離脱を行い得ることにある」と粘土で遊ぶことにより、概念から開放され、心の自由を生み出しやすいと述べている。

野外にあって日の光や自然光の中、一番良い状態に置かれるとされている。

(2) 図 13 大塚習平 「残されたかたち」

テラコッタ、石膏、木 H160 W60 D60

(第 65 回記念横浜美術協会展 2009 年)

図 14 大塚習平 「雲をかざえる人」

テラコッタ、石膏、木 H200 W200 D150

(第 63 回二紀展 2009 年)

図 15 大塚習平 「雲の記憶」

テラコッタ、石膏、木 H180 W60 D60

(第 66 回横浜美術協会展協会 2010 年)

(3) Henry Moore は彫刻の本質について

(Philip James “Henry Moore on sculpture” pp.69) の中で “Full three-dimensional realization. Complete sculptural expression is form in its full spetial reality” と述べており、完全な彫刻的表現の実現が、最大の三次元表現につながるとしている。

(4) Henry Moore は彫刻の本質について

(Philip James “Henry Moore on sculpture” pp.97) の中で “Sculpture is an art of the open air. Daylight, sunloight, is necessary to it, and for me its best setting and complemant is nature.” と述べており、彫刻は

テラコッタ彫刻の鑑賞と学生の造形に対する意識の変化



図 1



図 5



図 2



図 6



図 3



図 7



図 4



図 8



図 9



図 13

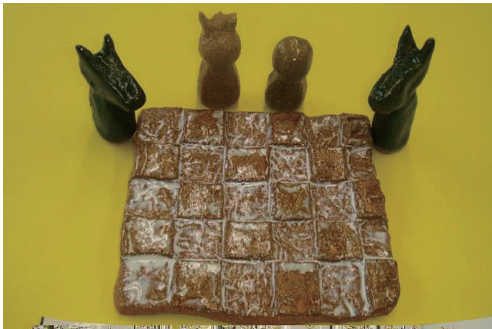


図 10



図 14



図 11

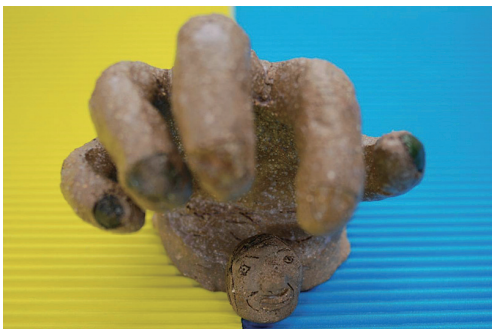


図 12



図 15

テラコッタ彫刻の鑑賞と学生の造形に対する意識の変化



図16



図19



図17



図20



図18



図21

Change in consideration of student to forming of terra-cotta sculpture appreciation

OTSUKA Shuhei

【abstract】

To destroy the concept to which the student "It is a tableware as for the combustion one" had biased in the clay production that had been imposed on the child care subject student, the terra-cotta sculpture of the human-size that the author had produced was set up in school for a certain period. And, it appreciated in the class, and the questionnaire survey was done. As a result, view to the combustion one extended, and the change was seen in consideration to production. The consideration of the educative effect by the appreciation of the self-made work was added.

【key words】

Education of Plastic art, sculpture, terra cotta, appreciation